

Case 9

インターンシップ科目 (国際学部国際学科/国際キャリア学科)

明治学院大学

セメスター制・1,302人(学部計)

取り組み概要

【事例タイプ】インターンシップ科目(国内&海外)
【実施主体】学部主導(一部+キャリアセンター)

国際キャリア学科は今年度からスタートしたため、今回は、既に実績のある、国際学科にフォーカスする。

【対象】2年生、3年生

【時期・期間】通年

【行き先】横浜YMCA、オーストラリア、ケニア等

【参加人数】国際学科=22名(内海外7名)(*国際キャリア学科 5名(内海外3名))

【単位認定】有(インターンシップ実習時間が150時間以上が6単位、100時間以上150時間未満が4単位)

【プログラム構成】PDSAサイクルで展開。事前学習⇒インターンの「実施」(Do)⇒事後学習⇒さらなる実践へ

背景・経緯

国際学部は、海外を含むキャンパス外での学び体験を以前より奨励しており、その一環でインターンシップ科目を立ち上げている。「校外学習」という科目において、海外派遣が14日以上のも(4単位)と7日以上14日未満(2単位)のもの2科目があり、2009年度からは、それに加え、よりキャリア教育に特化したインターンシップ科目を2科目開講した。学生はそれぞれのインターンを実施し、学びに結び付けていく。「インターンシップ」科目は、それぞれのインターンシップからの学びあいの機会＝ラーニングコミュニティとして機能。

プログラム内容(目的・教育内容・体制など)

【目的】学生のキャリア開発としての側面の他、国際的な視野に立った考え方や行動を身につけるという学部の教育目的の一環として行われている。国内と海外を問わずキャンパスの外での学びを奨励し、企業や国際機関、NGO/NPOなどでの実地体験を重視し、「現場に出て、自ら動き、考える」という経験は、学内での講義だけでは得られない学びを得し、個人を成長させる良い機会とする。

【事前学習】春学期の4～7月に行う。インターンシップの準備段階として、SWOT分析を通じた自己分析や、「働く」ことを考える読書、大学図書館に設置している日本経済新聞社関連データベースの日経テレコンの活用法などを専門インストラクターから受講し、情報技術・検索のスキルを向上させている。あわせてインターンシッププログラムの紹介を行い、受入先が決まった学生から、インターンシップ先の事前研究をまとめたプレゼンテーションを行わせる。

【派遣期間中】主に次の4つのインターンシップに関する情報源から学生はインターンシップ先を選択。

- ① **学部提携型**：学部が独自に開拓し提携している機関企業、団体等、学部がインターンシップの提携をしている機関でのインターンシップに参加。国外では、オーストラリア、ヴィクトリア州メルボルンにおける5カ月間の日本語教師T Aプログラム等がある。
- ② **キャリアセンター経由型**：大学内のキャリアセンターを経由してインターンシップに参加。
- ③ **業者委託型**：インターンシッププログラムを斡旋する業者を介して参加。
- ④ **自己開拓型**：学生自らインターネット等を検索、大学の授業やイベントで知り合った団体や企業に志願してインターンシップに参加。タイ北部の民族支援のNGOでの教育支援のインターン等。

全てのプログラムは、1カ月以上になっており、長いものでは、半年間のものもある。
また、派遣期間中は、ジャーナル(日誌or週誌)の作成を課している。

【事後学習】固定化した小グループを形成し、グループ内でのピアサポート、ピアラーニングを実施。

グループ内で、インターンシップで体験したことを語り合い、まとめのレポートをピアレビューする。インターンシップ中の失敗談や疑問を自分の事例としてまとめ、グループメンバーはどのように考えて、どのような行動・態度をとるか等を議論するケースメソッドを活用したディスカッションを行う。こうした反省的、反復的な振り返りを小集団で行うことで、自らの経験の相対化を促す。

最終的には、クラス全員で、グループ毎にインターンシッププレゼンテーションを行う。次年度学生への広報も事後学習の一環として、学生主導で行う。

検証・効果

事前事後でアンケートを取るようになっている。今後は、学内認知を高めるためにも、アンケートだけでなく、何らか効果を測定出来るアセスメントを導入したいと考えている。

受講学生は、事前事後で、前に踏み出す力や、自分の思いを言語化させる力がついていると感じている。学内でサークルを立ち上げたり、他の授業での態度（積極的にプレゼンテーションを行う等）を評価してくれている先生が増えてきている。

工夫・ポイント

学びのプロセスとしてPDSAサイクルを取り入れている。まず**事前に「実施計画」(Plan)を立て、自分が目指したい目標を設定した後、インターンシップ先を探し、「実施」(Do)。**その後、**インターンシップの実践を振り返り、目的は果たせたか、何を学べたのか、課題は何かを「学習」(Study)。**そのうえで、さらなる**「行動」(Action)を考え、さらに実践していく。**こうしたPDSAサイクルから、学生自身が自己理解を深め、インターンシップ先の企業や団体、機関での業務の理解やインターンとしての貢献度合いなどを深めていくようにしている。

運営面では、国際学部として、**インターンシップ委員会**（国際学科、国際キャリア学科の教員、**インターンシップ担当者3名**で構成）を立ち上げ、プログラム開発等を協力して行っており、国際学部事務室が事務面のサポートを行っている。

危機管理の観点では、国内で実施されるインターンシップに参加する学生は、インターンシップ賠償責任保険に加入、海外への派遣プログラムに関しては、海外旅行傷害保険へ加入させている。あわせて派遣責任主体である大学として、事故対策保険に加入している。

課題

○科目履修生を増やしたい。が、これ以上増やすのは以下の原因から困難な状況。

→①教職員不足 ②受入先拡大の難しさ ③危機管理 ④学生のレベル感の変化

①②：インターンシップ科目の重要性和有意義性をふまえ、インターンシップ委員会を立ち上げるなどしているが、参加学生が増えると、さらに受入先を拡大しないといけない。一つ一つの受入先と教育効果を確かなものにするべく、密な関係を築くための働きかけが、受入先が増えると現状の3名体制では困難になる。また、学生の振り返りに関して、グループワークを導入しているが、個別での振り返りも必要。しかしながら、担当教員不足の問題から行えていない。

③：人数が増えれば増えるほど、想定外のことが起き、その対応に追われる。結果、他の学生のケアが疎かになってしまう。

④：メンタル面で弱い学生が増えてきている。が、相談窓口が少なすぎる。

○インターンシップ期間を長くすれば長くなる程、学生は単位が取りにくく、卒業年度が遅れてしまう。（学内規定でもあるが、学外での取組みは150時間以上は10単位であり、それ以上は与えられない。それを認めると、現場へ派遣している時間が長くなりすぎ、評価がしにくくなることもある。）

あわせて、長期間であると費用もかかるため、奨学金等の措置が留学だけでなく、海外インターンシップ等にも使えるような奨学金制度を用意する必要がある。

今後の方向性

今後も持続的に学部のキーファクターとしてインターンシップ科目を置いていく計画。

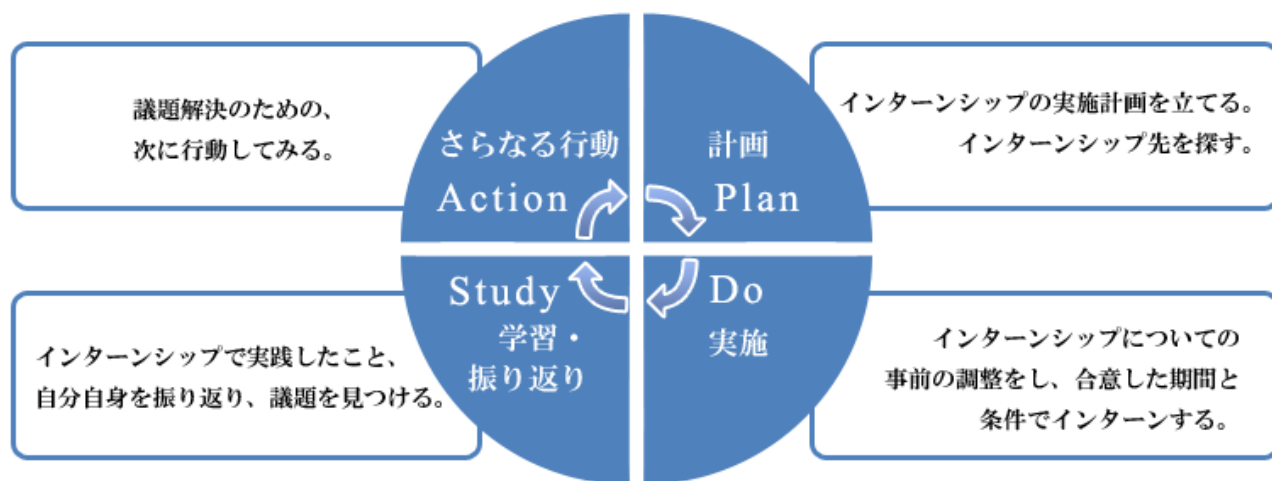
しかしながら、現地派遣が6か月等の長期プログラムは、その実感や理解をレポート提出させるだけでは、学生がマンネリ化して、意味のないものになることがある。そのケアを何らか出来るプログラムを開発する必要があると考えている。

一つの解決策として、派遣先の現地の大学と提携して、前半はその大学の授業を履修し、後半はインターンシップに参加するようなプログラムの開発ができないか考えている。

また、学内認知をもっと高めるために、学生による報告会を、授業の中や次年度の受講生の前だけでなく、学内での発信の場をもっと増やしていくことを予定している。

費用に関しては、企業を中心に学生活動の奨励金を出しているところが増えてきているので、学生個人に奨励金を確保するための働きかけをさせ、学生個人の金銭的負担を少なくしていくようにしたいと考えている。（現在も数名実施済）

概念図



全体概要・写真
出所) 明治学院大学インターンシップ科目の資料をもとに
ベネッセコーポレーション作成

Case 10

Global Collaborative University Education – GLUE (全学部対象)

立命館アジア
太平洋大学

クォーター制・5,330人（対象学生）

取り組み概要

【事例タイプ】グローバル協働教育プログラム（入学前教育から大学教養・専門教育まで。語学留学との併用含む）
【実施主体】アカデミックオフィス

GLUEは、「入学前留学プログラム」「グローバル・コミュニケーションプログラム」「Business In Japan」「Gateway Program」「South East Asian Studiesプログラム」と「協働ダブル・ディグリープログラム」からなる。このうち「協働ダブル・ディグリープログラム」は2013年度より開始のため、日本の学生が長期の体験活動を行っている実績を有するのは「グローバル・コミュニケーションプログラム」と「South East Asian Studiesプログラム」となる。以下は両プログラムに言及。

【対象】2年生、3年生（＊2年生優先）

【時期・期間】2年次春第二クォーター（グローバル・コミュニケーションプログラム） & 夏休み（South East Asian Studiesプログラム）

【行き先】アメリカ（グローバル・コミュニケーションプログラム）タイ・マレーシア（South East Asian Studiesプログラム）

【参加人数】30名（South East Asian Studiesプログラムはその半数となる）

【単位認定】有（グローバル・コミュニケーションプログラム＝10単位）

【プログラム構成】アメリカのセント・エドワーズ大学＝SEUで教養科目を履修⇒タイ・マレーシアではフィールドワークを展開

背景・経緯

GLUEは、立命館アジア太平洋大学（APU）と米国のセント・エドワーズ大学（SEU）が、これまでの交流実績をもとに、2011年度からスタートしたグローバル協働教育プログラム。両大学が協働開発した様々な留学・協働学習プログラムを協働で運営している。

APUとSEUは大学の理念や規模等という点だけでなく、国際的な教育を積極的に推進している点でも、大きく共通しており、2007年より学生・教職員の交流を進展させてきた。APUの次の10年をどうするかと考えた時に、非常に親和性の高いSEUと連携を深め、交換留学だけでなく、さらに学生が成長できるプログラムを協働で開発することを決めた。

プログラム内容（目的・教育内容・体制など）

【目的】両大学が協働開発をした様々な留学・協働学習プログラムを通して、両大学の学生が共に学び合い、言語能力やコミュニケーション力、異文化理解力を向上させ、グローバル社会に活躍する人材として成長することを目的としている。

【内容】GLUEプログラムは大きく5パートに分かれている。

①入学前留学プログラム（APUに入学が決定している学生がSEUへ短期留学、異文化体験及び大学生活準備のスキルを学ぶ 16日間）

②グローバル・コミュニケーションプログラム（APU学生が春 semester 第二クォーターにSEUへ留学 2カ月間）

③Business In Japan（SEU学生がAPUへ留学し、日本やアジアのビジネスについて学ぶ 1週間）

④Gateway Program（SEU学生がAPUへ留学し、日本語・日本文化中心に学ぶ 2カ月間）

⑤South East Asian Studiesプログラム（APU・SEUの両学生がタイ・マレーシアへ 2～3週間）

＜グローバルコミュニケーションプログラム＞

SEUとAPUが協働開講する「Communication Arts科目」等10単位の教養科目を履修。これまで身につけた英語力のさらなる向上、また異文化環境で教養科目を学びながらグローバル人材としてのコミュニケーション能力を身につける。受講者の言語基準はTOEFL®500点程度、到達目標をTOEFL®550点相当に設定。

※事前授業としてAPUにて、春第一クォーターに週2コマ、目標設定等の自律学習スキル・英語力、異文化理解の促進等留学前の基盤づくりを行う。

＜South East Asian Studies (SEAS) プログラム＞

グローバル・コミュニケーションプログラム終了後、アメリカからそのまま半分の学生は、タイ・マレーシアへ向かい、東南アジアの宗教・文化・社会をテーマにSEUの学生及び韓国カトリック大学（CUK）の学生と共にフィールドワークを行う。

日本でもアメリカでもない東南アジアの第3の国において、APU・SEU・CUK学生が協働学習を行うことにより、これまでの学びを飛躍的に高めていくことを目的とするプログラム。3カ国の学生が混合でグループを作り、プログラム全体を通して学んだ東南アジアの宗教・文化・社会についてフィールドワークを行い、プレゼンテーションを行う。

※両プログラム修了後には秋 semester 期間中に、月一回程度の事後授業を行い、TOEIC®/TOEFL®受験や、次年度の広報、SEU学生がAPUへ留学するプログラム（③&④）において、SEU学生のバディ活動に参加する。

（バディ：両大学の学生がそれぞれ自分の大学に来た学生をボランティアでサポートしている。）

検証・効果

【検証】GLUEのプログラムを通じて、学生が学んだ成果（ラーニング・アウトカムズ）を検証するために、**プログラム毎のラーニング・ゴールを設定**し、eポートフォリオを通じて、個々の学生の言語力、コミュニケーション力、異文化理解力、広い視野と実践力・応用力、批判的・創造的思考力等の到達度を検証している。
 今後は、eポートフォリオに学生が蓄積している内容にテキストマイニング等の手法を用いた分析を通じて、留学経験の前後に生じる学びや気づきのプロセスを可視化し、プログラム内容の向上に繋げていくことを考えている。また、APUとSEU二大学協働でグローバル教育の効果測定に関してアセスメント開発プロジェクトを進めつつある。

【効果】参加学生は、TOEFL®の点数も500点を越え、**交換留学に参加するようになり、授業への参加態度（プレゼンテーションを率先して行う等）はプログラム後の伸びが顕著に見られている。**

工夫・ポイント

○**全てのプログラムを協働で開発しており、お互いの大学で担当体制を整えている。**APUにプログラム専任の教員が2名おり、プログラムのブラッシュアップ、学生のフォロー等丁寧に行っている。

○**各種プログラムで学んだ教養教育の知識や経験を専門教育への学びへと繋げる「キャップ・ストーン科目」**を両大学共同で遠隔授業などで開講している。

○留学前・期間中・後を通じてのeポートフォリオを活用するにあたり、前年参加した学生をアルバイトで雇い、必要な研修を行った上で、日常のフィードバックは彼らが主に行い、学生（ピア）目線でのアドバイスを行うことで、より学生の不安や共感を重視している。また、教職員の負担軽減にもつながっている。**プログラム修了後もeポートフォリオ上に「GLUEラウンジ」を置き、後輩の相談に先輩が対応する等、非常に有効な活用をしている。**

○**学内に留学のサポートとして「学生留学アドバイザー」や、「言語自主学习センター」があり、学生の留学に向けた学習意欲を高めるために充実した支援体制を構築している。**

課題

○事後学習やキャップ・ストーン科目はあるものの、学部から完全独立のプログラムで、学部の学びとしっかりリンクさせるのが難しい。

○2年生優先にはしているものの、一部3年生が参加するため、ゼミ（演習）への参加が出来ないなど、カリキュラム上の課題がある。（ゼミは帰国後セメスターで再度申請、履修は可能）

○人数をこれ以上増やすのは厳しく、1年生の海外体験プログラムが終わってから2年生後半からの交換留学までのモチベーションを持続させるプログラムの体系化が必要。

○学生の負担を少なくさせる効果測定の方法を考える必要がある。

○今後のサステナビリティについて、学生支援経費や職員の雇用等、補助金による支援が不可欠な部分につき、補助期間終了後の予算確保が大きな課題。

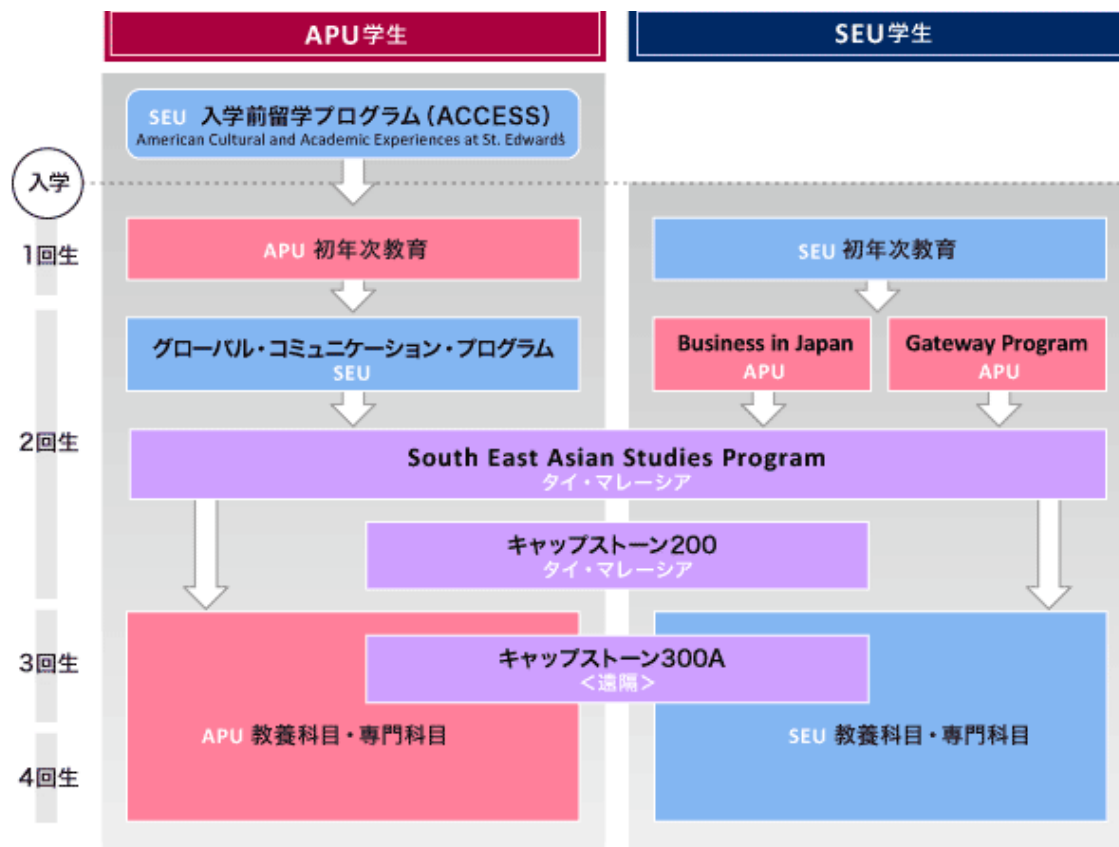
今後の方向性

文部科学省「平成23年度大学の世界展開力強化事業－タイプB：米国大学等との協働教育の創成支援」に採択されており、来年度で補助期間は終了するが、プログラムとしては、継続していく予定。
 2013年度（平成27年度）からは、「協働ダブル・ディグリープログラム」もスタートさせ、両大学で開講される教養教育と専門教育（社会科学・経営学分野）を体系的に学び、4年間で両大学の学位取得可能であり、両大学はさらに関係性を強めている状況。

また、今後は、キャップ・ストーン科目を含め、プログラム参加者のフォローアップをより強化していき、学部の学びとしっかりリンクさせていながら、学生の学びと成長に寄与する留学プログラムの充実化に向けたノウハウの共有、情報発信を行いたいと考えている。

GLUE全体概要

GLUEは、(1)積み上げ式協働教養プログラムと(2)協働ダブル・ディグリー・プログラムを大きな柱としています。両プログラム共通で、入学前に実施する「入学前留学プログラム(ACCESS)」、入学後に(1)・(2)のGLUEの各種プログラムで学んだ教養教育の知識や経験を専門教育への学びへと繋げる「キャップストーン科目」の履修があります。また、質の保証を伴った大学間交流の枠組みの形成や学びの質保証を重視し、各プログラムにおいて、ラーニングゴールを設定、それに基づくアウトカム・アセスメントを行い、学生にどのような力がついたのかをeポートフォリオを用いて検証します。



全体概要・写真
出所) 立命館アジア太平洋大学GLUE資料をもとに
ベネッセコーポレーション作成

Case 11

立命館大学・アメリカン大学学部共同学位 プログラム = DUDP Dual Undergraduate Degree Program

(法学部、経済学部、経営学部、産業社会学部、国際関係学部、政策科学部、文学部対象)

立命館大学

セメスター制・10,544人 (対象学生)

取り組み概要

- 【事例タイプ】 単位互換・認定型長期留学 (日米2つの大学を卒業する) プログラム
(※最短4年間で日米2つの学士号(卒業資格)を取得できる)
- 【実施主体】 国際教育センター (国際部)
- 【対象】 1回生、2回生 * 但し、1回生からの派遣希望者は、立命館大学入学前の応募手続きが必要
- 【応募・審査】 立命館大学での審査 (書類、英語テスト (TOEFL500~530点程度)、面接)
* 立命館大学の審査合格後、アメリカン大学・Admissions Officeの審査を受ける。
＜アメリカン大学の審査内容＞
① 高校卒業時の成績証明書を送付。GPA換算後3.0以上が必要。
② 志望理由 (英文エッセイ)、高校時の成績 (2回生派遣者は立命館大学での成績)、財政状況 (銀行の預金残高証明書) が審査。
③ 前期セメスター中 (5月下旬~6月(はじめ)に、アメリカン大学の英語力判断テスト (筆記、論述、個人面接) を行い可否を決定。事前の学習と研修の機会を経て渡米。
- 【時期・期間】 2年間 * 入学時点で派遣が内定している場合⇒1回生後期から3回生前期までの2年間
* 1回生時に応募した場合⇒2回生後期から4回生前期までの2年間
(留学期間中に最低80単位を取得することが求められ、その取得状況で期間延長もあり得る。)
- 【行き先】 アメリカ (アメリカン大学)
- 【参加人数】 5~20名程度 * 但し、現在はアメリカン大学との協定で上限は27名。国際関係学部生が8割程度。
- 【単位認定】 有
* 立命館大学では、アメリカン大学での80単位以上のうち40単位を上限に卒業単位 (全124単位のうち) に認定。
* アメリカン大学では、立命館大学での約90単位のうち40単位を卒業単位 (全120単位のうち) に認定。

背景・経緯

立命館憲章にある「国際社会に関わった学園づくり」を念頭に、教育、研究、社会貢献の分野で国際展開の一環として、DUDPは1994年度にスタート。
立命館大学とアメリカン大学の教員による交流を通じた信頼関係が起点となり、共同学位プログラム **(最短4年間で日米2つの学士号(卒業資格)を取得できる)** が開始された。約20年間に約330名を派遣している。
* スタート時は英語力のある学内優秀層から派遣していた。DUDP向けの入試が実施されたこともある。
* 立命館大学国際関係学部がAPSIA (国際関係大学院協会) の正規会員であることが、大学間の関係づくりにも功を奏した。

プログラム内容 (目的・教育内容・体制など)

立命館大学の在籍学部に関わらず、アメリカン大学の法学部を除くどの大学でも学ぶことができる。
アメリカン大学は国際関係学部、文理学部、経営学部、公共政策学部、コミュニケーション学部、法学部を持ち、各人の興味・関心に合わせて多様なカリキュラムを組み合わせながら複数の分野にまたがる学際的な学習ができる大学。DUDPの派遣学生も、同大学のカリキュラムで学ぶことができる。
* アメリカン大学では、法学部で学ぶことができない。
* 立命館大学では、映像学部、理工学部、情報理工学部、生命科学部、薬学部、スポーツ健康科学部はDUDP派遣者を募集していない。

各自の担当アカデミックアドバイザーと相談、どの学部にも所属するか、どのような科目を選択するか等の履修計画を立案する。
＜アメリカン大学で必ず履修すること＞
・「大学レベルでの英作文」(基礎、応用の2科目を履修)、「大学数学および数量的能力」(基礎統計、応用微分積分、微分積分から1科目を履修)、「プレースメント試験の受験」(低成績者は、いずれかに「有限数学」を追加履修)、「一般教育科目」(5分野 (①The Creative Arts、②Traditions that Shape the Western、③Global and Multicultural Perspectives、④Social Institutions and Behavior、⑤The Natural Sciencesのそれぞれから2科目ずつ履修))。
「各学部・学科・専攻ごとの必修要件 (基本的には主専攻科目 (Major) とその関連科目で必要とされる単位取得を満たす)」。* 成績はC = GPA2.0以上を修めることが必須。

ワシントンD.C.における就業体験もできる。アメリカン大学の各学部のアドバイザーおよび担当教員の許可のもとにインターンシップの登録をし、1セメスター最大6単位の取得が可能。
・公的機関、民間期間、NGO、在米日本企業、日本大使館等々の選択肢がある。

【体制】 アメリカン大学の担当者と立命館大学とは、プログラムを担当する両大学の教員が年に3回打ち合わせを行う。(6月にアメリカン大学から来訪、8月に立命館大学が渡航、1月に立命館大学が渡航 (定期協議会))

- 帰国した学生が在籍学部に戻った時に、教員より「**リーダーシップが身に付いている」「自分で組み立てていく力が身に付いている**」という驚きの声があがる。国内学生と**パフォーマンスが違う**。どのように人材を動かすか、を考えるようになっていく。
- **ワシントンDCで、学生が主体的に、現地で学生団体(ZARON)を立ち上げるなど、活発に動く学生もいる。**
* ZARON・・・ワシントンDCに留学する立命館大学、早稲田大学の学生が中心となり、インターンシップや現地日系企業等との交流を行う学生団体

- **長期留学の実現をサポートすることを目指し、グローバル・ゲートウェイプログラム(GGP)を立ち上げている。**
「それぞれの興味、関心、能力、条件、将来展望にあった留学プログラムを選び、その参加条件を満たす準備を行う。」「留学中に必要となる英語による実践的なアカデミックスキルと異文化環境における学びを最大化させるための知識とスキルを身につける。」「留学帰国後、自らのキャリア形成に向けて留学で得た経験と知識、語学力を更に高める。」ことを目的として、2009年度より学生をサポートしている。

<GGPのサポート>

- ・GGP留学準備授業（1-2回生）・・・英語 4 技能・テスト対策、アカデミックスキル修得、留学に役立つ専門講義
- ・GGPフォローアップ授業（3-4回生）・留学成果を高めるための専門講義、英語での専門講義科目受講（推奨）
- ・GGP先輩による低回生支援 ……留学帰国報告会等イベント、Workshopなど
- ・GGP教員による個人相談指導 ……留学時期・留学先の決定、英語力・アカデミックスキル向上、大学適応支援
留学中の各種相談支援、
留学先での学びと成長の振り返り指導、再適応過程支援、就職活動支援
- ・授業外での学習サポート ……英語試験対策セミナー、Study Group Sessionなど
(立命館大学に伝統的に存在するオリター制度に目を向け、ピアエデュケーションの活用も、2012年度後期より実践されている。)

図表 GGPのサポートプログラムの位置づけ



- **現地での就業体験(インターンシップ)を単位化。**
アメリカン大学の各学部のアドバイザー、担当教員の許可を得てインターンシップの登録を行うことで、1 セメスターで約3単位（最大6単位まで）の単位取得が可能。
・また「AU Abroad」というアメリカン大学に在籍しながら、世界の都市で 1 セメスター間学習し単位も取得できる短期留学プログラムがある。
- **奨学金の用意**
アメリカン大学⇒授業料の30%分が、各セメスターごとに減免。受給資格は「累積GPA3.0以上」を維持すること。
立命館大学⇒留学プログラム参加奨励奨学金として、およそ240万円の奨学金を支給（年80万円×3回の分割支給）。2年目以降、奨学金を受給の留学時の学費・授業料は、受給のない総額の45%ほどに少なくなる（\$96,378⇒\$43,469 * 両方の受給を受けた場合、2年間）
アメリカン大学における学修状況の審査をセメスターごとに行う。

- 4年間で2つ大学の学位取得を課すために、スケジュールが厳しい。
 - * 逆に帰国後、国内での学びに物足りなさを訴える学生も存在する。
帰国後の事後学習のプログラムの組み方、授業のあり方に工夫の余地がある。
 - * 一部、クォーター制の導入を実施しており、帰国生の学びが断絶しないように試みている。
(立命館大学に伝統的に存在するオリター制度に目を向け、ピアエデュケーションの活用も想定している。)
- 候補となる学生の発掘・確保が難しい。
 - * 基礎学力があり、留学に対応できる語学力を備えた学生を、1回生、2回生から確保することが難しい。(DUDPプログラムへの参加者も少なくなる傾向がある。1クラスをユニットとできるよう20~30人の参加者は確保したい。)
 - * 学生、保護者が海外体験の必要性を感じる機会や情報が少ない。これを増やすことは必要である。
- 意欲を持つ学生の経済的負担は大きい。
 - * 学費・授業料だけでなく、渡航、保険、生活費、雑費等々を含め、費用が高額になる。
(具体的なプログラムを開発するための費用が手当てできると助かる。)
 - (1年以上の留学プログラム参加者も受給できる国費の奨学金制度が希望される。)

- 参加する学生を年間、総勢20人~30人くらいまで増やしたい。
 - * アメリカン大学から始まったプログラムはサフォーク大学、アルバータ大学へと広がっている。

Case 12

BIE Program(5-week Program) (Semester Program) (全学部)

龍谷大学

セメスター制・16,811人(学部計)

取り組み概要

【事例タイプ】留学プログラム(海外)
【実施主体】RUBeC教務会議(事務局:国際部)
【対象】全学年
【時期・期間】・5-week Program(夏:8月初旬~9月中旬、春:2月中旬~3月下旬(約40日))
・Semester Program(春:3月下旬~7月下旬、秋:9月下旬~2月中旬(約120日))
【行き先】アメリカ カリフォルニア州・バークレー市
【参加人数】5-week Program募集人員25名、Semester Program募集人員25名(4回計・約100名)
【単位認定】あり。5-week Program最大6単位、Semester Program最大18単位
*卒業年次生は参加しても単位認定されないことがある。
【プログラム構成】説明会⇒応募⇒選考⇒事前指導⇒留学⇒報告会

背景・経緯

体験を通じて英語を学ばせることを意図し、2006年度よりプログラムを開始した。
これに先行して、別途、2回生以上を対象に1989年より交換留学制度を開始していたが、この制度への志望者を増やしていくことも導入目的の1つである。
BIEプログラムは、国際交流の導入プログラムとして、学生の留学に対する不安を払拭させ、海外での学びをより身近に感じてもらおうことを意図している。(交換留学は25カ国、55大学との間で実施(2014年2月現在)。留学期間中の龍谷大学の学費は免除されることになっている。※ただし留学在籍料は必要。)

プログラム内容(目的・教育内容・体制など)

「語学研修」、「講義」、「Community Service Learning(CSL・ボランティア活動)」を統合した留学プログラム。
多民族共生社会について知識と経験の両面から学ぶことで、英語運用能力の向上を主目的としながらも、広い視野と柔軟な発想を学ぶことを目指している。
龍谷大学の教育・研究の海外拠点として、カリフォルニア州バークレー(アメリカ)に「Ryukoku University Berkeley Center(RUBeC)」を開設し、龍谷大学が独自開発した留学プログラム「BIE Program」を開始している。
*RUBeCは、カリフォルニア州バークレーにある浄土真宗センターの事務所を間借りし設置されている。このセンターは、講堂のほか4つの教室、米国仏教団(BCA)、浄土真宗本願寺派の事務所、宿泊施設が整っている。
BIE Programは、現地スタッフの派遣を得るなど、この米国仏教団(IBC)の支援を得て実施している。

【目的】 コミュニケーションを通じた英語運用能力の向上とともに、多民族文化が共存するアメリカ社会での現場体験を通じて、広い視野と柔軟な発想を学ぶ。

【概要】 ・5-week Program ①英語集中講義(3週間)、②CSL(2週間)、③講義(1科目)
・Semester Program ①英語集中講義(11週間)、②CSL(4週間)、③講義(2科目)

【選考】 BIE Program留学申込レポート、面接、履修状況、学業成績により総合的に判断し選考。
*但し、特に学生のプログラム参加に対する意欲を重視しており、事前の語学能力は重視していない。
*5-week Programは1、2年生を優先に選考。

【事前指導】オリエンテーション3回、事前授業12回(合宿を含む。)

【留学】(英語)
ESIにおいて「Communication Skills」を受講し、プレイメントテストによりクラス分けし、オーラルコミュニケーション、発音、聴解、アメリカ文化について学ぶ。
Semester programでは、「Integrated Skills」も受講する。
※English Studies Institute/カリフォルニア大学バークレー校のExtension Programの元教員によって設立された語学学校。授業はカリフォルニア大学バークレー校のキャンパス内にて実施する。

(ボランティア)
ESIのコーディネートの下、「Community Service Learning」を学ぶ。この経験を通して、コミュニティーに対する意識・良識を高めると同時に、ボランティア活動を通じて実際の英語を使うことで英語運用能力を高め自分自身に対する自信を形成。ESI教員の指導のもと、学生それぞれが課題を設定し、チームワークで取り組む。
*ボランティア先: Senior Services ・高齢者の話を聞いたり、言いたいことをわかりやすく伝える。
Elementary Education ・学校菜園での活動のアシスタント等。
Social Welfare ・教会で行われる貧困、庇護介入、教育支援のアシスタント等。
Environmental Protection ・環境保護、自然環境を取り戻す活動等。

(講義)

IBS (学生交換協定校) による講義を開講。講義、フィールドトリップやディスカッションを通して、英語で学習した内容を自分の言葉を使って話すことができるようにします。

* IBS/米国仏教大学院は、BCA/米国仏教団が母体となり設立された仏教教育研究機関。

1982年頃より学生支援協定を締結し交流を続けていた。

【宿舎】 YMCAとホームステイの2タイプを準備。

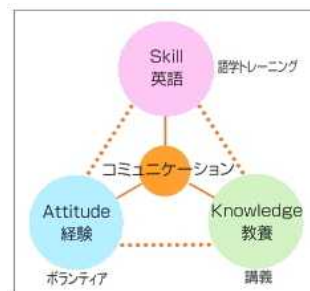
* YMCAはバークレー中心部に位置し、各種公共機関等へのアクセスも便利。ジム等の施設も持つ。

* ホームステイはアメリカ人の習慣や考え方を知る機会としても紹介。バス又はBARTで学校まで移動。

【事後学習】

(報告会)

留学終了後、留学報告会で留学成果の報告を実施し、成果を共有。



【検証】 英語能力向上を第一目標にしており、リスニングを中心にスコアはあがっていると見られる。

【効果】 BIE Programをきっかけに交換留学への応募者を増やしたいと考えている (年間70~80名程度)。

* 特にSemester Programに参加した学生は、勉強以上のものを持って帰っている印象がある。

- ・語学研修、講義、CSL (ボランティア活動) を組み合わせ、語学力アップとともに視野の拡大、柔軟な発想の習得を目指している。
- ・現地事務所 (RUBeC) に大学協定校より職員の派遣、プログラムの運営の協力を得て、現地に出かける学生のサポート体制を充実させている。現地で国内の国際部同様の対応をしてもらっている。プログラムコーディネーターは日本におり、現地担当者 (ESI) と打合せを行う。
- ・留学費用の一部を大学が負担している。(Semester Programは通常学費に含まれる (渡航費用、保険料、宿舎費、生活費は自己負担)。5-week Programは長期休暇期間に実施するためBIE授業料 (15万円) が別途必要。但し、大学も授業料の一部を負担。
* 成績優秀者には奨学金を給付。5-week Program10万円 (最大2名)、Semester Program30万円 (最大2名)
- ・事前授業を12回実施。そのうち6回は合宿 (BIE Weekend) を行っている。合宿では英語力向上のための会話レッスン、日本への留学生との交流等を盛り込み、留学生活への不安軽減を工夫している。また、「チーム龍谷」を標榜し、お互いが助け合い、皆で頑張る雰囲気づくりを行い、現地でも単独活動は重視せず、集団行動を是認している。「安心感を確保しつつ、とりあえず出す。」ことを目指し、そこから次へのステップをつくらうとしている。
- ・帰国後のモチベーションの維持にも配慮し、留学経験のある学生が自主的に組織化した留学サポーター (SABS : Study Abroad Supporters) と連携し、帰国者の逆カルチャーショックを緩和するとともに、留学に関心を持つ学生の裾野を広げようとしている。

- ・留学プログラムに関心を持ち、応募する学生を確保することが課題。入学当初から、いかに学生に留学に目を向けさせるかが難しい。(交換留学の募集を年3回 (7月、11月、2月) 行っており、そこに来る学生を増やしたい。)
- ・交換留学に向けた学生の動機づけ、環境づくりを行うことが必要で、学生間で競争させる前に、留学に出かけることができるレベルに到達する学生を増やすことが必要。
- ・帰国後の対応が大事。次のステップに進みたくても、金銭的事情等で向かうことができなったり、アピールできない学生に、引き続き動機づけを図っていくことが必要。海外に出ることが難しい学生には、寮チューター等、国内で国際交流に関わることの紹介等を心がけている。逆カルチャーショックにも対応が求められる。
- ・留学を支援する職員のグローバル化も必要。現地事務所は協定校に職員派遣を依頼しており、日本からスタッフは送っていない。経験を積むことで事例が蓄積され、職員に勤や気づきが働くような環境を整えることが必要と考えている。
- ・留学に伴うリスクは減らすことができると考えている。準備期間の教育や対応こそ大事。

- ・派遣する学生数は拡大していきたい。学問体系によって留学に対する熱心さや関心もことなる。2015年4月開設予定の国際学部 (国際文化学部を改組) を突破口としたい。